

キヤノンの使命。

それはまだ誰も想像できない映像の可能性を形にすること。

この世界にまだ無いものを作る。
EOS Rシステムは、その強い意志から生まれた。

EOSに魂を宿したのも、それはこれまでの常識を捨て去る覚悟。

30年の成功に甘んじる道か。次の30年へ挑む道か。その答えが、EOS Rシステムである。

同時に、通信システムなども含め将来への備えと可能性を組み込むことを意識しました。その結果、次の30年における技術的發展にもフレキシブルに対応できるシステムが遂に完成したのです。

命を削るような大英断から約30年。「次の30年」を見越して開発したのが、フルサイズミラーレスカメラのEOS Rシステムです。今回もまた冒険でした。EOS伝統の「快速」「快適」「高画質」という開発哲学を守りながら、キヤノンの最新光学技術を最大限に生かせるシステムとしてミラーレス構造を採用し、

世界初※8K搭載カメラ。困難だと思われることだからこそ、やる。やらなければならぬ。

EOS Rシステム誕生から9年、今回のEOS R5とR6は第一世代であり、ともに大きくステップアップできたと

感じています。そして、皆様に次なる映像世界の驚きを少しでも身近に体感していただけるよう、R5では世界初の8K動画撮影機能を搭載しました。撮影用デバイスも、鑑賞用デバイスよりも必ず先行することが必要であり、我々は先駆者として覚悟を持ってその導人を決断しました。

昔からEOSの「E」を冠したカメラには、革新的な機能を積み、ブランドの中核を担ってきた歴史があります。例えばEOS 5D Mark IIで初めてフルHDの「EOSムービー」を搭載し、映画の聖地ハリウッドで瞬時に評判を呼びました。

それがきっかけとなり、世界中の映像作家や制作業界に多大な刺激を与え続けている「Eの系譜」を引き継ぐことは、R5が負う運命でもありました。EOS R5とR6はカメラとして、まったく新しい次元に踏み込めたと感じています。雄大な風景もトップアスリートのスピードも、ジャンルを問わずハイクオリティな写真が撮れる。今後もレベルアップされたお客様ニーズに応え続け、お客様とキヤノンで共に触れ合い、さらなる高みを目指していきます。

※2020年7月8日時点、発売済みのレンズ交換式デジタルカメラにおいて、キヤノン調べ。

EOSはこれから先、さらに進化と深化を重ねていく。それは映像の未来を信じ、創り続けてきたキヤノンの使命だ。

これからカメラは、単体ではなくネットワークやクラウドなどとインタラクティブに連携しながら、人々の日常の中に自然に溶け込んでいくのではないのでしょうか。

アートやエンターテインメントなどの映像文化はもろろん、人間と人間、人間と機械、あるいは機械同士の間においても映像データは飛躍的に重要度が増していき、違いがありません。

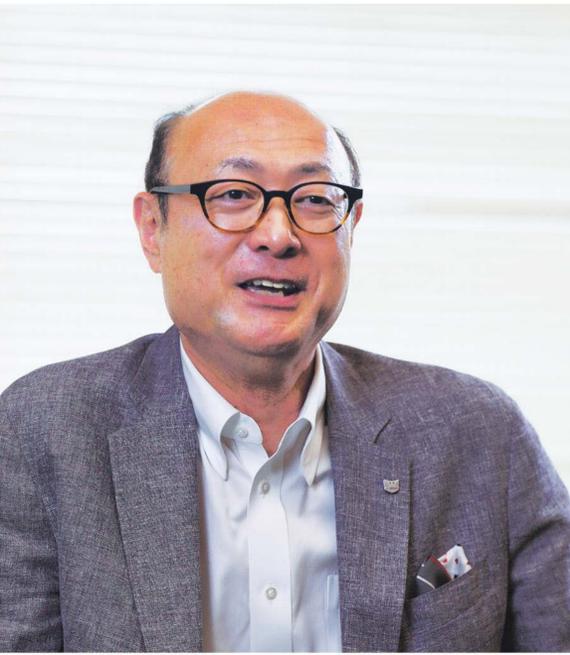
コンピュターやAI技術、5Gに代表される高速・大容量通信などの複合的な進化の中で、VR、バーチャルリアリティ(仮想現実)、MR(ミックスリアリティ)複合現実のような映像技術もダイナミックに巻き込んで進んでいくでしょう。

世の中ではいつそうテレコミュニケーションが重視されていくでしょう。コロナ禍でリモートでのやりとりが拍車がかかり、映像情報がカギとなる新しいコミュニケーションが広がっています。

今後、映像情報の果たす役割が増大していく中、カメラはIoT社会の「目」として高度な画像処理を行う「頭脳」として更に重要性を増していきます。映像情報を持つ無限の可能性を形にし、社会課題を解決することが我々キヤノンの使命だと確信しています。



EOS Rシリーズと豊富なレンズ群
※Rシリーズは、RFレンズに加え、専用のマウントアダプター(別売り)を装着することにより、EFレンズやEF-Sレンズも使用できます。(EF-Mマウントのレンズ、シネマEOSレンズには非対応です。)



キヤノン株式会社 常務執行役員 イメージコミュニケーション事業本部長 戸倉剛
1982年の入社以来、EOS-1系のプロフェッショナル一眼レフカメラから、EOS Kiss デジタルなどの普及型一眼レフまで、さまざまなカメラ開発に携わる。「EOS Rシステム」においてはイメージコミュニケーション事業本部長として陣頭指揮を執った。

信じて、任せることのできるカメラ。
EOSはまさに、新しい時代で戦う「相棒」だと思う。

遙か遠くのツキノワグマと目が合う。このカメラでしかできない体験だった。

明らかに撮り方が変わった。露出やビント、カメラを信じて任せることができるから。

前川 ツキノワグマと目が合ったその瞬間、私の気持ちを見透かすかのように、カラのオートフォーカス(AE)機能が迷わずクマの目にピントを合わせてくれた。カメラが動物をここまで認識してくれるんですね。

前川 カメラの目を使い、なすは職人技が求められる面もあります。しかし、Rは暗かや動物の手前木の枝があつたときのピント合わせもカメラ任せで、構図や瞬間のチャンスに神経を集中できる。明かに撮り方も変わりました。

前川 EOS R5とR6は犬も猫も鳥の顔、顔そして全身を検出できます。おそらく、認識条件などがカメラにもマッチしている。

前川 今回、撮りたいものをピントを合わせるスピードと正確さ、一度ピントの合った被写体を捉え続ける追従能力など、AE性能全体を非常に高いレベルまで上げました。

前川 実は当初、動物検出のAE性能には半信半疑でしたけれど、いざ使ってみたらクマの目のみならず、ニホンカシカやニホンザルの目も高い確率でピントが合い、驚きました。

前川 野生動物の撮影では遠望レンズを使う場面が多く、カメラを構えたときのわずかな動きで手ブレが目立ちます。R5で新たなカメラ本体にも内蔵された手ブレ補正機能は本当に助かりました。

前川 これまでキヤノンは、レンズの中で最適な手ブレ補正を行っていましたが、カメラ本体にも補正機構を組み込み、2つを協調制御させるようにしました。その結果、より高精度かつ効果的に手ブレを打ち消すことができるようになりました。

前川 レンズを選ぶ楽しさを改めて感じています。

前川 今回のRF800mm F11 IS STMとRF800mm F11 IS STMという超望遠レンズもラインアップに加えました。

前川 いざ撮り始めると、本当に使いやすく、描写も素晴らしい。野生動物の撮影は山や森に分け入りますから、軽量化も重要。今使っている望遠レンズよりも軽量化が、アダプターを介してR5でも使えるの助かりました。

前川 レンズを選ぶのも、小型軽量化できるのが長所の一つですが、手にする道具ですから、たまたまに小ざかりせず、操作ボタンなどの大きさや配置にもこだわり抜きました。

前川 絶妙なホールド感と操作性ですね。写真は、新しいカメラに制作意欲を燃やしたり、カメラに愛着を抱くことこそ、本質。そこにつながると思います。EOSは撮り手に刺激を与えてくれます。

前川 ミラーレスカメラは一眼レフカメラのように内部にミラーを備える必要がなく、小型軽量化できるのが長所の一つですが、手にする道具ですから、たまたまに小ざかりせず、操作ボタンなどの大きさや配置にもこだわり抜きました。

前川 絶妙なホールド感と操作性ですね。写真は、新しいカメラに制作意欲を燃やしたり、カメラに愛着を抱くことこそ、本質。そこにつながると思います。EOSは撮り手に刺激を与えてくれます。



Photo: 前川貴行 [撮影機材]カメラ:EOS R5 レンズ:RF800mm F11 IS STM

写真家
前川貴行
1969年生まれ。1997年より動物写真家・田中光常氏の助手を務め、2000年、フーランズとして独立。日本はもとより、北米、中米、アフリカ、アジアなど地球規模で野生動物の姿を追い続けている。写真展・写真集多数。最新刊は「SOUL OF ANIMALS」(日本写真企画)。2008年、日本写真協会賞新人賞受賞。第11回経ナショナルジオグラフィック写真賞グランプリ、日本写真協会賞。



EOS R5

このカメラは、人に寄り添ったカメラ。撮る側の「迷い」が、まったくなくなってしまう。

意味があると考えられています。今回はR6の特長、いところの描写の繊細さや、暗い影などがベタッと黒一色にならず、明るさや色の微妙な移ろいをこれまでに余すところなく描いてくれました。

写真家
公文健太郎
1981年生まれ。雑誌、書籍、広告で活動しながら、国内外で「人の営みがつくる風景」をテーマに作品を制作。現在、川や半島など土地の特徴と人の暮らしのつながりを探るシリーズを制作中。2012年、日本写真協会賞新人賞受賞。写真集・著作に「ゴマの洋品店」、「糖十人」、「地が結ぶ」、「静川」などがある。2020年12月に日本の半島をテーマにした新刊を刊行予定。



EOS R6

このカメラは、人に寄り添ったカメラ。撮る側の「迷い」が、まったくなくなってしまう。

意味があると考えられています。今回はR6の特長、いところの描写の繊細さや、暗い影などがベタッと黒一色にならず、明るさや色の微妙な移ろいをこれまでに余すところなく描いてくれました。



Photo: 公文健太郎 [撮影機材]カメラ:EOS R6 レンズ:RF24-105mm F4 L IS USM

動画から切り出した静止画すら美しい。8K動画は動画と静止画のシームレスな融合を実現した。